

親子で共に育つ、 森のようちえんヒュッテ

森のようちえんってどんなところ？

はじめまして。私たちは、西予市で森のようちえんヒュッテという親子で参加する、共同保育の場を運営しています。活動は、毎週火曜日と金曜日。西予市内の山、田んぼ、川、海、公園など、地域のいろんな場所へ出かけています。

森のようちえんとは、野外での遊びを軸とした幼児教育の総称。1950年代のデンマークで、1人のお母さんが、子どもたちを連れて毎日森に出かける活動をしたのが始まりと言われています。

「ようちえん」という言葉から、認可幼稚園のようなものがイメージされがちですが、保育園、幼稚園、認定こども園、子育てサークル、自然学校のイベント事業など様々な形態で運営されています。また鳥取・長野・広島県など、独自の認証制度を創設し、運営費の補助を通じて森のようちえん活動を応援している自治体もあります。

ヒュッテに参加してくれる子どもの年齢構成は0〜6歳と幅広く、保育園や幼稚園に通う前の子や、活動日だけ保育園等をお休みして参加する子など様々で

す。参加者は西予市の方が多くですが、大洲や宇和島から来てくれる親子もいます。

地域がまるごと森のようちえん

私たちは活動の拠点となる園舎を持っておらず、「すでに地域にあるもの」を活用させてもらいながら活動しています。ある時はメンバーのお家の裏庭や畑で、ある時は、知り合いの山や田んぼで。また、別のNPOが運営する農場で動物と触れ合わせてもらったり、公共施設を拠点にして隣接する裏山などに出かけたりすることもあります。

限られた空間だけでなく、地域をまるごと教育資源ととらえて活



歴博の裏庭でお昼ごはん

動しているのです。

大事にしていること

①自然の中でとことん遊ぶ、②地域の素敵な大人たちとふれあう、③子どもの育つ力を信じて見守る、森のようちえんを運営していく上で、この3つを特に大事にしています。

四季を通じて変化する多様な自然環境の中には、石、木、水、土など、遊び道具となる素材が豊富にあります。



草花を使った色水遊び



大潮の日に海を探検



(一社)ノヤマカンパニー
加藤 千晴

す。子どもたちは、興味を持ったものにとことん取り組みながら、五感を使い、自分で考え、行動する力を身につけていきます。

そして、時に自分自身の気持ちと向き合いながら、人間としての根っこ（たくましい体としなやかな心）を育てて欲しいと考えています。

こうした力はIQなどの認知能力と区別され、「非認知能力」とよばれています。近年、就学前の質の高い教育は、子どもたちの非認知能力の育成に重要な役割を果たし、成人後の社会的・経済的 성공にもつながること、また他の世代にくらべて幼児期の子どもへの教育の投資効果が最も高いことを示す研究報告が出されました※1。このことから、政策の面でも幼児教育への関心が世界的に高まっています。

自然の中で、見守り育てる

「森のようちえん」と言うのと、自然体験の要素が注目されがちですが、一緒にいる大人が「見守る」ことも同じくらい重要です。

活動中は、基本的に「だめ」とは言いません。大きな怪我につながりそうな時は注意しますが、子どもの「やりたない」気持ちを大切にしています。「できない」と相談に来たら、子供自身が解決できるように「○○してみたら」とピン

トを伝えます。やりたい、悲しい、楽しい、困っているといった、子どもたちの気持ちを受け止め、寄り添いながら、できるだけ見守るようにしています。子どもたちは、大人とのこうしたやりとりを通じて、自己肯定感（ありのままの自分を認められる力）を育てていきます。

けんかをすることもありませんが、大人の役割は、子どもたちの気持ちの交通整理です。無理やり仲直りさせたり、謝らせたりするのではなく、子どもたちの心が動くまでじっくり待ちます。心が揺れ動き、モヤモヤすることがありますが、安易に答えを出すのではなく、子どもも大人も一緒に考え続けることが大切だと思うのです。

前述の非認知能力は、自己肯定感を根っこにして育ちますが、内閣府の調査によると、日本の若者は、自己肯定感が低い傾向にあるようです※2。私たちは、自然の中で見守る保育を実践することを通じて、子どもたちの非認知能力や自己肯定感を育てていきたいと考えています。



田んぼの中の水路でジャンプ

地域の中で、親子で育てる

インターネットのおかげで、たいていのことは調べられるようになり、疑似的に体験することも可能になりました。「わ



これは、何だろうね？

かったつもり」になってしまいがちな時代だからこそ、私たちは「直接体験したり人とふれあったりして、心と体で感じる」ことの価値がますます高まっていると考えています。

地域には自然があるだけでなく、暮らしや遊びの知恵を持っている大人もたくさんいます。こうした環境の中で、子どもだけではなく、親子で一緒に心と体を動かし、成長していける場をじっくり育てていきたい。しかしながら、田舎には教育の選択肢が多くはありません。だからこそ、私たちの活動が選択肢の一つになればいいなあと考えています。

参考文献

- ※1 中室牧子著「学力の経済学」2015
- ※2 内閣府「子ども・若者白書(概要版)」

平成26年版